吉蔵の如来蔵義考

鶴　見　良　道

衆生における悟への根拠を与える仏教教理学のなかでも、如来蔵思想は、成仏への可能性の根拠を衆生自身の本性のうちに認め重要なる位置をもつものである。如来蔵思想が中国仏教思想構築に与えた影響の大なる事は、諸先学の指摘される所である。印度如来蔵思想形成に大きな影響力をもつた『勝鬘経』の標準的註釈書『勝鬘宝窟』を著した吉蔵は、如来蔵に対し「仏法大意」・「仏法根本大事」[1]として非常に高い評価を与えている。本研究ではその点に着目し般若中観思想を基調とした吉蔵が、如来蔵をどの様に解釈しているかを中心にして考察を加えたいと思う。

『勝鬘経』は、如来蔵について一切の仏法を成就している如来の法身が、煩悩に覆われている状態即ち一切衆生に悟への因が内在する事を如来蔵として、如来蔵を在纏位の法身と定義するのである。『勝鬘経』に於いてこの様に定義される如来蔵を中国仏教は、如何に理解しているのであろうか。『涅槃経集解』によれば

僧宗曰。（略）勝鬘経言。如来蔵是仏性。在因為蔵。在果為仏。非始非終。隠顕為異耳。（大正37・417・中）

とか

法瑤曰。仏性之理。終為心用。雖復暫為煩悩所隠。如珠在皮中出不久也。（大正37・452・上）

等「隠・顕」による如来蔵解釈がみられる。また吉蔵が、多く引用批判する所の浄影寺慧遠においても『勝鬘義記』に

蔵義在隠。法身離相。在隠難明。出相易顕。欲以出纏。易顕之身。顕示彼蔵。（P・ch、二〇九一、5紙20～21行）

の如く「隠・顕」による如来蔵解釈がみられる。今問題としている吉蔵の如来蔵観を考察するに、『勝鬘宝窟』において

約法身顕蔵顕時法身。本為煩悩所隠名如来蔵也。（大正37・72・下）

と説き、如来蔵について古来よりの「隠・顕」解釈をもつて説明するのである。

吉蔵は、従来からの「隠・顕」をもつて如来蔵を解釈する

のであるが、その意味する所は他の註釈者と異るとして批判の対象を慧遠に絞り、彼の解釈を取意の形で引用して

慧遠『涅槃経義記』

彼如来蔵為妄所覆。所覆之蔵与彼顕時法身為本。説為仏因。説仏性。如此仏性与彼実諦及仏法身無二無別。（略）如来蔵者仏性異名論其体也。是真識心於此心中該含法界恒沙仏法。故名為蔵。又為無量煩悩所蔵亦名為蔵。如来法身蘊此蔵中名如来蔵。又此蔵中出生如来。是故亦名為如来蔵。（略）初中貧女喩諸凡夫。無徳称貧。能生真解故名為女。（大正37・690・下～693・上）

吉蔵『涅槃経遊意』

問。地論亦隠顕義。与今何異解。云語雖同其意大異。彼有如本蔵体。為妄所覆。名之為隠。復則現出此体。名之為顕。如貧女宝蔵暗室瓶瓮。則用此譬為義。今則不爾。此譬為破始有。故言本有。豈可守斯為定耶。今明。只迷故名隠名蔵。豈尚別有此体可隠。只悟故名顕名法身。無体可顕。迷故名隠隠無所隠。悟故名顕顕無所顕。只迷因縁故隠。悟因縁故名顕。（大正38・231・下）

と述べ解釈の異りを示している。吉蔵が、地論師として引用批判する所の慧遠の「隠・顕」如来蔵解釈に就て一言すれば、慧遠の心識説は七識説で、特に八識義[2]が重要とされている。慧遠は、第八識に八名を上げその中に真識[3]が位置付けられ、第八識は真識とされるが、相が性質を隠す時妄の本となると説明する。『勝鬘経』に説く「若し如来蔵なくんば苦をきらい涅槃を楽求する事がない。なぜならば六識心法智の七法は不住なるから」とか『楞伽経』の水波の喩の引用からも真妄相対依持が意味されている事が理解出来る。故に慧遠は第八識を真妄和合識と考えている。真識と言つても真妄和合の識であるから、これを分析すれば体としての自性清浄心があり、その用としての第八識がある。故に慧遠は、如来蔵は仏性であるとしつつ如来蔵によつて悟への因たる自性清浄心を論ずるのだと説明する。そして真識には、体たる自性清浄心即ち仏性が内包されるから如来蔵であるとして、「顕」となればその自性清浄心が前面に顕れるとし、また真識には、妄たる煩悩性もある事からその自性清浄心が隠されれば「隠」となるとして如来蔵を説明している。それに対して慧遠を引用批判する所の吉蔵は、衆生に於て生死流転すべての在方に対して顛倒を起し迷つているが故に「隠」と言い、そう言う衆生の在方を如来蔵と言うのである。だから隠されるべき体はないと説明する。又縁起たる諸法の在方を如実知見によつて悟るが故に「顕」と言い法身と言うのだと解釈を加えている。迷つている時は衆生自身全体が迷つているのであつて、その時点では隠されるものはない。又逆にすべての在方に就て悟つているから顕と言うのであつて、顕なる時は即ち真理を身体としたものであり、その時点顕される所のものはないとしている。この様に吉蔵は、如来蔵を理解するにあたつて衆生中に煩悩に覆われているが悟への内因的なものを如来の獅子吼として認めつつ、煩悩に覆われていれば隠とし

て衆生自身全体が「隠」であると説き、真理を体得すれば如来蔵のもっている法身面が顕れるのであって、その時点では「顕」であるとして如来蔵を実相論的解釈を以て説明するのである。

吉蔵は、如来蔵解釈をさらに展開して「隠」たる如来蔵と「顕」たる法身との関係を説いて『勝鬘宝窟』に

明法身者。即是実相真如法也。此実相正法。隠名如来蔵。此実相法。顕故名法身。唯是一実相法。約隠顕不同。故有蔵之与身。（大正37・68・下）

と説明している。吉蔵によれば、法身とは真如を体得している即ち諸法の在方を体としている事から、諸法に遍満する実相真如の法であるとしている。その実相の正法が、生死流転の衆生界中に内在する即ち煩悩によって迷い隠たる状態にある事を如来蔵とし、諸法の在方を如実知見することによって実相の正法が明らかになると言う事で、実相真如の正法が顕われるを法身とすると定義し、如来蔵と法身とを実相正法の立場より論ずるのである。この考え方は、吉蔵が『法華義疏』の中で

諸法実相者。法華論云。謂如来蔵法身之体。不変故此亦名実相亦名仏性正法。正観之異名也。（大正34・488・下）

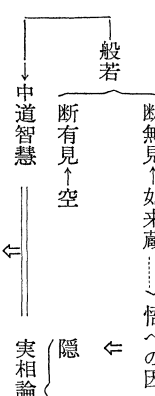
と示される事からも理解出来、吉蔵の実相観に如来蔵が大きな意味をもっている。法身・如来蔵と言っても実相真如の立場よりすれば不二一如の法である。がしかし、現実差別相対の世界に於てすれば、如来と衆生とは厳然として異るのであって「顕」たる法身と「隠」たる如来蔵とは、それぞれの立場に於て異るのである。この現実観を捕えつつ、法身・如来蔵とは不二一如なる事を示して『勝鬘宝窟』に

如来蔵中恒沙仏法同一体義分。如就諸徳説名為常。離諸徳外無別有一常性不可得。我楽浄等類亦同然。又就常等説為解脱。離常等外無別有一解脱。自性法身波若類亦同然。如是一切。是故諸徳皆無自性無此性相。故説為空。（大正37・73・下）

と説くのである。法身が如来蔵として隠たるも法身の功徳と言う面に関して言えば、法身と不二なる如来蔵に具足されているのが道理である。法身の徳は常楽我浄とも換言できる。しかし、法身と言えばも唯一絶対として不変なるものではなく、空即ち無自性としての在方を体としていると説明するのである。如来蔵が本質的にもっている悟への因が、煩悩より脱すれば法身と同一となると言う点で仏の功徳が如来蔵に具足されていると説かれるのである。しかし、徳としての別体があるわけではなく、徳の体は空であるとして吉蔵は、如来蔵解釈の裏付けを空観をもちいて説明しているのである。こうして吉蔵は、般若空観の立場より「隠」たる如来蔵と「顕」たる法身との論理的相即関係を述べている。また『勝鬘宝窟』に於て

又欲説波若。故説仏性。波若即是中道智慧。令衆生遠離有無二見。令知生死之中。無虚妄我故。息其有見。有如来蔵。息於無見。（中略）以如是等諸因縁故。説如来蔵。此是仏法之大意也。（大正37・67・中）

と吉蔵は説いている。この一文は、印度如来蔵思想の根本的論疏である『宝性論』の第一五六偈に「以前諸経に於ては、凡て一切の境は空で、雲・夢・幻像の如くであると説かれていたのに、何故仏性が一切衆生中に有ると諸仏がここに於て説くのか」（RGV1・156）（大正31・840・中～下）と言う問が想起されるのであり、吉蔵の立場より、この『宝性論』の疑問に答えを出している様にも思われる。右記の如く吉蔵は、如来蔵を説く事は般若を説く事であると定義する。なぜならば、般若は中道の智慧そのものであるからだと説明するのである。般若は、衆生をして有無の相対的二見を遠離せしめるが、その内容は、生死流転せる現実世界に於て生じる有見を無我・空の側面より断じ、仏への向上性の因を説く如来蔵思想によつて無見を断つと説き、吉蔵は、如来蔵に般若思想を融合させて論究するのである。そして、「隠・顕」によつて実相論的論理的構造を以つて説明する吉蔵の如来蔵観によつて、三論無所得の実相の立場をより徹底させる事が仏法の大意即ち仏法の真髄であると説くのである。この様な吉蔵の如来蔵観による論理構造を図式化すれば下記の如くとなろう。



無所得中道正観

以上、如来蔵思想は、如来の立場からの主張であり、衆生に内在する悟への因を認め、それにより導かれる在方と法身とは同格とするのが『勝鬘経』の定義である。この定義を吉蔵は、古来から用いられる「隠・顕」解釈を導入して解釈を加えるのである。しかし、その「隠・顕」解釈には、他にみられない無所得を立場とした吉蔵の実相論的解釈が伺われ、且つ如来蔵思想が、吉蔵の思想構築に果たした論理的構造をも合せて理解出来得たのではないかと思われる。

1　平井俊栄『中国般若思想史研究』「仏法の大宗」参照
2　吉津宜英「大乗義章八識義研究」（『駒大仏教学部研究紀要第三十号』）
3　吉津宜英「浄影寺慧遠の「真識」考」（『印仏研究第二十二巻第二号』）

（東邦学園）